

鬼神童女無宿

作・民富田智明

東京工芸大学芸術学部映像学科

映像表現研究室 卒業制作（2008年）

○河越竹虎一家・賭場(夜)

行灯で照らされる盆中。

畳の上に白布の長い盆御座が敷いてある。それを囲むように、壺振りの胴師と、刺青を露出した上半身裸の合力、張子の旦那衆が座っている。丁半博打の盆である。

テロップ「河越竹虎一家」

胴師「入ります」

胴師が壺とサイコロ二つを掲げ、盆御座に勢いよく叩きつける。

合力A「入りました！ さあ張った！」

合力B「どうぞ、張って下さい！」

胴師の左右の合力が声を張って勝負を煽っている。旦那衆は、好き好きに丁

目、半目に張札を張る。

そこに、頭に二本の立派な角を生やした、明らかに場違いな少女の姿。主人

公の鬼神・花吹雪のお凜(9)である。

袖のない紅装束に白袴、鮮やかな珠の

耳飾と首飾、それに、紐で縛って首筋

辺りで尻尾のようにして垂らした、艶

やかな栗色の長い髪……。その様は、

周囲の男達から浮いて、かなり目立つ。

お凜、胴師の目を見て、丁目に張る。

胴師、お凜の目を見る。

合力A「ようござんすか？ ようござんす

ね？」

合力B「はい、揃いました！」

合力AB「勝負！」

胴師、壺を上げる。

サイコロの出目は、四と六。

合力A「シロクの丁！」

合力B「シロクの丁、丁です！」

旦那衆がざわめく。

旦那A「あちゃあ、丁だったか……」

胴師「旦那、悪うおましたなあ」

合力、負け分を吸い上げ、瞬時に勝ち

分の配当を渡す。

お凜の所にも、勝ち金が渡される。そ

れを傍らに置く。

隣の旦那が、お凜に話しかける。

旦那A「いやあ、ついでますなあ。あつしは

もう、底つきましたわ」

旦那A、苦笑いしている。

お凜「……とつつあん、そりゃあ残念じゃっ

たのう」

旦那A「しかしまあ、さすがですなあ。さつきから見てると、何度勝ち続けておりますかい？」

お凧「お蔭さんで、十回は勝っておるかのう」
旦那A「その鮮やかなまでの張りっぷり、退きっぷり、おまけにその可憐なお姿、鬼神様にはケチのつけようがないってもんです」

旦那A、笑いながら扇子で扇ぐ。

お凧「そんな……わしはまだまだ半端者じゃけえ……」

お凧、ちよつと照れて赤くなる。

胴師「入ります」

胴師、壺を振る。

合力A「さあ、入りました！」

合力B「さあ、どつちもどつちも！」

合力が煽る。

旦那A「そうだ、縁起担ぎに鬼神様のお名前をお聞きしたいんですが」

お凧「名乗るほどのものでもないがのう……」

お凧、胴師の目を見る。

お凧「わしは、花吹雪凧凧之姫鬼神。またの名を、花吹雪のお凧じゃ！」

バンツと、威勢良く張札を半目に張る。

Ⅰ『鬼神童女無宿』

○山の麓の全景(昼)

小高い山の谷間を流れる川に沿って田園が広がり、ぽつぽつと民家が点在している。そこに、一本の街道がのびているのが見える。

テロップ「昔々、武州高麗郡山谷村にて」

お凜の声「腹あ減ったあ〜！」

お凜の声が反響する。

○村外れの街道

三度笠に縞の道中合羽という旅装姿の

お凜が、どこにでもいる赤毛の柴犬に

しか見えないお供の狗神・遠吠えの牙

吉(こ)を先導に歩いている。

お凜「腹減ったあ〜、腹減ったあ〜」

肩を落とし、腹に手を当てながら連呼

するお凜。

お凜「牙吉い、腹減ったのう〜」

ぐうぐうと、お腹の音。

お凜「さつきから、ずうーっと腹の虫が収ま

らんわ」

また、ぐうぐつと、お腹の音。

お凜「またじゃあ。腹減ったあ〜」

牙吉「姉さん、いい加減にしてくれ」

牙吉が人語でしゃべる。

お凜「何がじゃあ？」

牙吉「さつきから腹減った腹減ったつてよ、

叫んだつて飯は出ねえ。聞いているこっちが

腹減つちまうよ」

お凜「だつてえ、わしはのう〜」

牙吉「驚も鷹もねえ」

お腹の音。

お凜「むう〜、わしはもう、だめじゃあ〜」

牙吉「しかたねえな……」

牙吉、辺りを見渡す。近くに小川が流

れているのを見つける。

牙吉「姉さん、魚でも獲つて食おうぜ」

お凜「釣竿持つとらんぞ？」

牙吉「姉さんの刀は飾りかい？ それで刺し

て獲ればいい」

お凜「できるかのう？」

牙吉「できる、姉さんならできるはずだ」

お凜「う〜ん、やってみるか」

またまた、ぐうぐうと、お腹の音。

。小川

透き通る清流に魚が泳いでいる。魚に向かつて、ザクツと白刃が突かれる。

だが、魚は器用にそれを避け、虚しく切っ先が川底に突き刺さる。

お凧「おのれえ〜」

白足袋と草鞋を脱ぎ、白袴をまくつて川に入っているお凧。

底は浅く、小さなお凧が入っても水位は膝くらいまでしかない。川岸で、お

凧を見守る牙吉。

牙吉「姉さん、そこだ！」

お凧「とう！とう！」

刀を突き刺す。

しかし、全然魚は獲れない。

お凧「むう〜、だめじゃあ〜」

お凧、肩を落として落ち込む。

牙吉「何だよ、投げちまうのかい？」

お凧、瞳を潤ませて牙吉を見る。

お凧「だつてえ、わしは人しか斬ったことないけえ、魚なんか獲れんのじゃ」

牙吉「……普通は逆だけどな」

お凜「大体、主神にこんなことやらせて、眷属のお前が、何故そんなところで座り込んでおるか。牙吉、お前が獲っておくれ」

牙吉、お凜を睨む。

牙吉「姉さんが腹減って仕方がねえって言うからやつてんだぜ？ 人里まで出れば草鞋の脱ぎ場もあるってのによ、姉さんにやあ、忍耐つてもんが無さ過ぎるぜ。おいらはなあ、姉さんがサイコロ遊びしている間、雨の日も風の日も、灼熱でも極寒でも、朝も昼も夜も関係なく、いつも外で待ってんだぜ？ これは、姉さんが越えるべき試練だ。てめえでやんなくちやいけねえ」

お凜「こ、こいつめ、わしに説教するか？

ええ度胸じゃー！」

お凜、牙吉を睨む。そして、牙吉に刃を向ける。

お凜「前言撤回するんじや。さもなくば斬る

ん？」

牙吉、目を緩める。

牙吉「おいらは、姉さんが好きだから言うてんだけどな……」

お凜「むう……」

お凜、牙吉に背を向ける。

お凜「……馬鹿者。そんなこと言われたら、やるしかないじゃないか」

牙吉「俺は狼だ。馬でも鹿でもねえ」

お凜「ふん、柴犬のくせに」

お凜、再び魚を狙って刀を突き刺し始める。

× × ×

テロップ「半時後」

お凜「そこだ！」

ザクッ！ お凜が水面に刀を突き刺す。

お凜「牙吉、獲った、獲ったで！」

牙吉「おお！」

お凜、満面の笑みで獲物を刺した刀を

水から揚げ、牙吉に駆け寄る。

お凜「ほれほれ、大物じゃけえ！」

牙吉「おめでどう、姉さ……」

牙吉、顔から血の気がひく。

お凜「どうしたんじゃ？」

牙吉「よく見てみなよ……」

お凜、獲った魚を見る。魚は腐った死

骸で、ところどころドロドロになり、

白い蟲がのたくり回っている。

お凜「い、嫌あ！」

お凜、死骸をぶん投げ、川の水で刃を洗う。

牙吉「貧乏くじひいたな」

お凜、しょんぼりして泣きだしてしま
う。

牙吉「……姉さん」

お凜「こんなに頑張ったのに……腐った死骸
しか獲れんなんて……わしは、ダメじゃ」

牙吉「魚獲りは真剣勝負だ。博打と同じよ。
いつでも勝てる訳じゃねえ。今日は、ツキ
が無かつただけだよ」

お凜「……牙吉」

お凜、牙吉の目を見つめる。

牙吉「確かに魚は獲れなかった。姉さんは魚
に負けたんだ。だが、戦って潔く負けたこ
とで、一段と強くなれたんだぜ？」

お凜、牙吉をぎゅつと抱く。

牙吉、気恥ずかしそうに遠くを見る。

牙吉「おいおい、花吹雪のお凜の名が泣く

ぜっ」

お凜「もう、泣いておる」

その時。

少女の声「だ、誰かあああ！」

少女の悲鳴に、お凜と牙吉がはつとす
る。

お凜「な、なんじゃ？」

牙吉「わからねえ……が、あつちの神社から
だ！」

牙吉が、小川近くの鳥居を見る。

お凜、涙を拭つて立ち上がる。

お凜「とにかく、行くで！」

牙吉「おう！」

お凜と牙吉、鳥居に向けて走っていく。

○村外れの神社・境内

森の中に小さな社殿があるが、お参り
する人の気配はない。

そんな誰の目もないところで、百姓の
娘つばき(9)が数人の暴漢に襲われ
ている。つばきは地面に体を押し倒さ
れ、身動きすらできない状態である。
つばきは気が動転し、ただただ泣き叫
ぶばかり。暴漢達は、気味の悪い笑み
でつばきの体を眺める。

暴漢A「へっへっへ、嬢ちゃん、こんなとこ

に一人で来ちゃいけねえよ？」

暴漢B「怖い人に捕まっちゃうからなあ！」

暴漢C「でも、おら達は優しい兄さんばかり

だからよ、泣かなくていいんだぜ？」

暴漢達、つばきの服を無理矢理脱がそ

うとする。

つばき「嫌あああ！」

つばきが絶叫したとき、暴漢Aに飛び

つく何か。

暴漢A「あぐっ！」

何が起こったかわからず、啞然とする

残りの暴漢が暴漢Aを見ると、牙吉が

その牙で喉笛をズタズタに噛み千切っ

ている。

暴漢B「う、うわあ！」

暴漢C「や、山犬？」

暴漢が驚いて、飛び上がるようにして

つばきから離れる。つばきも、牙吉に

噛み殺されている暴漢を見て怯える。

と、どこからともなく小刀が飛んでき

て、暴漢Bの胸に突き刺さる。

暴漢B「うっ！」

暴漢B、その場に崩れるように倒れる。

暴漢Cが、小刀の飛んできた方を見る

と、そこには鋭い眼光で刀を抜いて向

かってくるお凜の姿。

お凜「この、下衆がああ！」

暴漢C「あ、ああ……」

うろたえて何もできない間に、暴漢C

はお凜に斬り倒される。

突然のことで、つばきは声も出ずに震

えている。

血振りをして刀を鞘に納めたお凜が、

つばきに歩み寄り、手を差しのべる。

お凜「もう大丈夫じゃけえ……大事ないか？」

つばき、震えたまま怯えている。

牙吉が駆け寄ってくる。

牙吉「この子、怯えきつてるぜ」

お凜「……怖い目に遭ったんじゃけえ、無理

ないか」

お凜、つばきを優しく抱く。

お凜「わしは何もせん、何もせんからな……」

○同・参道

社殿に続く石段に鳥居があり、その足

下にお凜と牙吉、つばきが座っている。

お凜は、流麗な音の篠笛を吹いている。

つばき「……鬼神さん、笛、上手だね」

お凜「え、そうかな？」

つばき「さつき怖い目に遭ったばかりなのに、

スーツと落ち着いてきちやった。ありがと

う」

お凜「何もされとらんで、本当によかったな

……えつと」

つばき「私、つばき。鬼神さんは？」

お凜「花吹雪凜凜之姫鬼神という長つたらし

い名があるがのう、花吹雪のお凜と名乗っ

とる」

つばき「じゃあ、お凜ちゃんていい？」

お凜「ええよ。で、そこにいるのがわしの相

棒の牙吉じゃ」

つばき、牙吉を見る。

つばき「へえ、牙ちゃんかあ」

牙吉「遠吠えの牙吉たあ、おいらのことよ」

牙吉、尻尾を振っている。

つばき「いきなり飛びかかってくるきて怖かった

けど、助けてくれてありがとう」

つばき、牙吉を撫でる。

牙吉「……き、気安くおいらに触らない！」

牙吉、尻尾を振りながらそっぽを向く。

つばき「牙ちゃん、照れてる？」

お凜「みたいじゃのう」

つばき「かわいい！」

つばき、牙吉をぎゅつと抱く。

牙吉「や、やめろつて！ おいらは狼だ。男

の中の男だ。かわいいなんて言われても嬉

しくねえ！」

その割には尻尾を振り続けている牙吉。

お凜「つばきちゃんにモテモテじゃな！」

お凜、愉快そうに笑う。だが、急に真

顔になる。

お凜「じゃが、つばきちゃん、こんな村外れ

に女子一人で来るなんて、危ない輩に襲つ

てくれと言ってるもんじゃけえ、もうやめ

た方がええで？」

つばき「うん……」

つばき、牙吉を放して顔がしゅんとな
る。

お凜「この神さんも、女子一人も守つてや

らんなんて、どうかしとるで。どんだけ偉

い神さんなんじゃ」

つばき「……お凜ちゃん、この神様じやな
ごの。」

お凜「うん。わしらはな、一つの場所に鎮ま
らず、諸国の家々を渡り歩く宿無神じゃ」

つばき「……じゃあ、うちに来てくれる？」

お凜「つばきちゃんちに？ ええんか？」

つばき「うん。助けてくれたお礼だよ。……

それに、お凜ちゃんにお願いがあるの」

お凜「お願い？」

つばき、お凜の手を握り、目を見つめ
る。

つばき「おつかさんを、おつかさんを助け

て！」

○とある百姓家・外観(夕頃)

藁葺き屋根の素朴で小さな家。

お凜の声「……」(当家のお兄いさん、斯様に
不躰で甚だ失礼でござんすが、どうかお控
えなすつて下さい」

○同・軒先(夕頃)

お凜が足を半歩開き、腰を落として左
手を膝の上につき、右手を前に突き出

している。その傍らにお座りしている

牙吉。その後ろにつばきがいる。

お凜「早速ながら、ご当家軒下三尺三寸借り受けましての仁義を發します」

お凜に相對して、百姓の倅伸太郎(2)

(2)が、正座して地面に手をつき、畏

まっている。

お凜「一呼吸おいて」従いまして、手前、生国と發します所、関東でござんす。関東と申しましても、いささか広うござんす。高き山々の美しさ、武州西国と發します所、秩父でござんす。神名は花吹雪凜凜之姫鬼神。通り名を花吹雪のお凜、花吹雪のお凜と發します。お見かけ通りのしがない宿無神でござんす。どうか、今宵の一宿一飯お許し下さいますよう、宜しくお頼ん申します」

牙吉「同じく、手前、生国は関東、武州西国は秩父にござんす。縁持ちまして、主神、花吹雪凜凜之姫鬼神様に従います眷属神にござんす。神名は遠吠猛牙突立大狗神。通り名を遠吠えの牙吉、遠吠えの牙吉と發し

ます。お見かけ通りの宿無神。どうか、一
宿一飯宜しくお頼ん申します」

伸太郎「わざわざ御丁寧なお言葉有難うござ
いやす。あつしはこん家の長男で、名を伸

太郎と言いやす。お見かけ通りの貧乏百姓

でございます。大したおもてなしはできや

せんが、こちらこそ謹んでお招き致しやす。

神さん、どうぞ宜しくお願え致しやす」

お凜「有難うござんす。では、直りなすつて」

伸太郎「神さんから直りなせえ」

お凜「では、御一緒にお直りなすつて」

全員「有難うござんした！」

全員、姿勢を直す。

伸太郎「神さん、どうぞお入り下せえ」

○同・土間(夕頃)

伸太郎「さ、どうぞどうぞ」

伸太郎に連れられ、お凜と牙吉が土間

に入ってくる。その後ろをつばきがっ

いて行く。

伸太郎「どうぞ、居間へお上がり下せえ」

お凜、草鞋を脱いで床板に上がる。伸

太郎とつばきも床板に上がる。牙吉は、

土間にいるまま。

つばき、牙吉を見つめた後、伸太郎に
目をやる。

つばき「牙ちゃんは？」

伸太郎、お凜を見る。

伸太郎「御犬様は、お上がりになりやすか？」

お凜「こいつは土の上が好きじゃけえ、こゝ」

「でええじゃろ？」

お凜、牙吉を見つめる。

牙吉「ま、いいぜ、それでも」

お凜「外に潜む悪しきものに睨みを利かして

こその狗神じゃけえ、しつかり番を張って

貰わんな。頼むでー！」

牙吉「合点でさー！」

牙吉、一声ワンつと吠える。

○同・居間(夕頃)

古くなった畳敷きの床に、破れた襖や

障子、壁は汚れ、戸は歪んでいる。中

央には囲炉裏がある。囲炉裏の周りに、

お凜とつばき、伸太郎が座っている。

伸太郎「………そうですか。つばきの危ないと

こゝろをお助け下すつて、本当に有難うござ

いやす。何とお礼をすればええのかわかりやせんで、この通りです」

伸太郎、お凜に深々と頭を下げる。

お凜「伸太郎さん、顔を上げておくれ。今晚の宿り場が見つかっただけでも恩の字じゃけえ。こちらこそ有難うな」

お凜も頭を下げる。

お凜「しかし、つばきちゃんほどの女子を一人で村外れに行かすのは危ないで？ わしが通りかかったから良かったもんじゃが、下手をしたら……」

伸太郎「へい……あつしが馬鹿だったんでさ。

田畑の面倒をあつしでこなさなければならんもんで……」

伸太郎、目を潤ませてつばきを見つめる。

伸太郎「ごめんな、つばき。本当に無事で良かった。何も知らんで雑草抜きしててよ、

悪い兄ちゃんだな、おらは」

つばきの目も潤み始める。

つばき「……ううん。兄いは悪くないよ。一

生懸命、田畑で頑張ってるんだから」

伸太郎「でも、おめえは毎日おつかさんのた

めにお参りに行ってくれてるのに、おらは

一度もねえ！」

つばき「私が兄いの分まで一生懸命お祈りしてたから……」

伸太郎「……つばきい！」

伸太郎、つばきを抱き締める。

つばき「兄い、怖かった、怖かったよお〜」

つばき、伸太郎の胸で泣く。

お凜「……つばきちゃん、ええ兄さんがいて幸せじゃな？」

お凜、二人をしばらくそっと見つめ続ける。

と、その時、襖の向こうから、ゴホゴ

ホと激しい咳が聞こえてくる。

お凜、気になって襖を少し開けて覗き込む。

○同・襖の奥(夕頃)

(覗き視線)隙間から隣の寝室が見える。そこには、布団の中で寝込んでいる母おたか(45)の姿。苦しそうに

咳をしている。

○同・居間(夕頃)

お凜、伸太郎の方を向く。

お凜「……もしかして、おつかさん？」

伸太郎「……へえ」

お凜「……挨拶させて貰ってもええか？」

伸太郎「是非、お願いしやす」

お凜、そつと襖を開ける。

○同・寝室(夕頃)

お凜、寝室に入り、静かに襖を閉める。

おたか、お凜に気付いて襖の方を見る。

おたか「あんたさん……鬼神様ですか？」

お凜「……うん。そうじゃ」

お凜、おたかの前まで来て正座する。

おたか「これは……」

おたか、身を起こしそつとする。

お凜「いや、そのままでええ。楽にしててな」

おたか「そうですか？ すいませんねえ」

お凜「わしは、花吹雪凜凜之姫鬼神、またの

名を花吹雪のお凜という宿無神じゃ」

おたか「私はおたかです。見ての通り、病で

寝込んでいましたね……。話は襖越しに聞

いてました。つばきを助けて下さったみた

いで、有難うございます」

お凜「今晚、わしと土間にいる牙吉を泊めさせて欲しいんじやが、ええかのう？」

おたか「娘の恩神を追い払うなんて罰当たりなことは出来ませんよ。見ての通りの貧乏百姓ですから、大したおもてなしは出来ませんが、ゆっくりして行って下さいね」

お凜「おつかさん、有難うな」

お凜、おたかにお辞儀をする。

おたか「いえいえ、こちらこそ」

お凜、静かに立ち上がって、襖を開ける。そして、おたかの方をもう一度見る。

お凜「おつかさん、ゆっくり休んでな」

お凜、寢室を出る。

○同・居間(夕頃)

居間に戻ったお凜は、襖を静かに閉めて、伸太郎に小声で話かける。

お凜「あのおつかさん、わしの見た感じじやが、相当悪いんじゃないか？」

囲炉裏の前に座るお凜。

伸太郎「へえ……貧乏百姓のうちには、とて

も医者にかかる金もなければ、薬も買ってやれんで……放っておけば、そのうちに「つばき」だから、おっかさんの病気をなんとか治して貰おうと思って、毎日お寺で仏様に頼んだり、神社で神様に頼んだりしてたの」

お凜「……そうだったんか」

つばき「私、一生懸命お祈りしてたんだよ。だけど、おっかさんは悪くなるばかり。それで、思い切って村外れの神社までお参りに行ったの」

お凜「……それで、幸か不幸か、暴漢に襲われたことでわしと会ったって訳じゃな？」

つばき「うん……」

お凜「つばきちちゃん、さつき、鳥居の下で、

おっかさんを助けてって言ったの？」

つばき、身を乗り出してお凜を見つめる。

つばき「ねえ、お凜ちゃん、鬼神様ならおっかさんを治せるよね？ 元気にしてくれる

よね？」

お凜「うん」

お凜、眉間にしわを寄せて腕を組み、

少し思索する。

つばき「無理なの？」

お凜「確かにわしは鬼神じゃけえ、神の端くれではあるがのう、わしには、病を治すこととはできんのじゃ」

つばき「そんな……」

つばき、しゅんとする。

お凜「こん国には神とて八百万もおるんじゃけえ、その一柱ごとには微々たる力しかないんじゃ。酷いことを言うようじゃが、全能の神などおらんどのう……」

伸太郎「……鬼神さん、おっかさんのことは天の定めとして受け入れやすんで、気に留めんで下せえ。つばきを助けて下すつただけでも、十分過ぎるくらい有り難いことだし」

お凜「じゃが、ここうしてこの家に敷居を跨いだのも何かの縁じゃ。病に倒れておるおっかさんを見てそのままにしておいたんじゃ、一宿一飯の義理に欠くことになるでこのう。

わしとしても、出来る限り、何かしてやり

たいんじゃ」

つばき「お凜ちゃん……」

伸太郎「鬼神さん……」

お凜の目を見る伸太郎とつばき。

お凜「けど、わしは喧嘩と博打と篠笛しか能がないけえ、はつきり言つて役には立たんのじゃ……」

すると、土間で聞き耳を立てていた牙

吉が口を挟む。

牙吉「姉さんだつておつかさんを助けること
ができるぜ?」

お凜、牙吉の方を見る。

お凜「……どうすればいいんじゃ?」

牙吉「サイコロだよ。博打で金を稼ぐんだ」

お凜「あ、そうか!」

お凜、はつとして手を打つ。

牙吉「伸太郎さんよ、要は金があれば何とか
なりそうなんだろ?」

伸太郎「まあ、そういうことですが」

牙吉「姉さんは、こう見えても天下の博奕打
ちなんだぜ。その筋じゃあ、花吹雪のお凜
の名を知らねえもんはいねえくらいにな」

伸太郎「え? そうなんですかい?」

お凜「そんなに褒められたもんでもないけど
な……生まれた時から、サイコロと一緒

じやったからのう」

お凜、懐からサイコロを取り出し、手

の中で転がす。

お凜「伸太郎さん、この村に賭場は開かれて

おるか？」

伸太郎「へえ。谷先菊太郎つて親分の一家が

ありやして、ちようど今夜開帳されるはず

でやす」

お凜「そうか。善は急げじゃ。おつかさんの

ために、わしが一肌脱いじやろう！」

つばき「お凜ちゃん、ありがとう！」

つばき、お凜の手を握って見つめる。

伸太郎、お凜の前で畏まる。

伸太郎「鬼神さん……おつかさんに、この貧

乏百姓に力を貸してやって下せえ！ お願

えます、お願いします！」

伸太郎、何度も頭を下げる。

お凜「ちよ、ちよつと、そんなにされたらや

りにくいけえ、やめておくれ！」

お凜、慌てて伸太郎を止める。

○谷先一家・外観(夜)

テロップ「谷先一家」

犬の鳴き声が聞こえる。

何本もの篝火に照らされて、比較的大

きな構えの家が建っているのが見える。

門の前に、見張りの三下が立っている。

○同・門前(夜)

三下A、大きなあくびをする。

三下A「ふあく、眠い！」

三下B「おい、シヤキツとしてねえと、また
代貸にどやされるぜ？」

三下A「わかってるがよう、いくら氣い張っ
ても、眠氣にやあ勝てねえだ」

三下B「違えねえ……」

三下Bも伸びをする。

三下A「そーいやおめえ、知ってるか？」

三下B「何がだ？」

三下A「近頃よ、こん村に盗人が出るって話
だ」

三下B「盗人？」

三下A「疾風の三治ってえんだが、その名の
通り逃げ足の速い野郎だよ、犬でも追いつ

けねえって話でい。おまけに、三治ってや

つあよ、七首の腕にも覚えがあるってんだ

からいけねえや。たとえ追いついたとして

もよ、ドスツとぶつ刺されて御陀仏よ」

三下B「そいつぁ物騒な話でねえか」

三下A「それがおめえ、うちの賭場で遊んでる旦那衆を狙いでもすりゃあ、うちは世間様に安目を売る事になつちまう」

三下B「そんなことになつたらよ、俺たちやおまんま食っていけねえだ」

三下A「だからよう、俺達はこうして目を光らせているだ」

と言いつつ、あくびをする三下A。

三下B「おめえの目の光は信用できねえだ」

と言いつつ、三下Bもあくびをする。

そこに、牙吉を連れとお凜がやってくる。

三下、お凜に気付き、門の前に立ち塞がる。

三下A「おう、ちよいと待つだ」

三下B「こは娘っ子の来るところじゃねえだ」

お凜「入っちゃダメかのおう？」

三下A「ダメでい！」

三下B「さっさと帰んな！」

牙吉「おい、兄さん方」

三下A「い、犬がしゃべった！」

牙吉「しゃべって何が悪い。それに、おいらは犬じゃなくて狼だ」

三下B「どつちにしろよ、娘っ子は賭場には入れねえ」

牙吉「あんたら、姉さんの頭に生えた二本の立派な角が目に入らねえのかい？」

三下、三度笠から突き出たお凜の角を見る。

三下A「あ！」

三下B「あんたさんは、まさか！」

お凜「そのまさかじゃ」

お凜、口から小さな牙を覗かせて、ニコツと微笑む。

三下AB「失礼しやした。鬼神さん、どうぞお入り下せえ！」

三下、深々とお辞儀をする。

お凜「済まんのうち。お主らもお勤め大変じゃな？」

三下AB「はい！」

お凜、牙吉と門をくぐる。

○同・賭場の盆中(夜)

壺が盆御座に叩きつけられる。

合力C「さあ張った！ どうぞ張って下さ

いー」

合力D「どうぞ、どうぞ張って下さい！」

敷布団十枚を並べ、白布できれいに包

んだ盆御座が、畳の上にドンと乗って

いる。その盆御座を囲むように、胴師、

合力、張子の旦那衆が座っている。部

屋の隅には、見張りの三下が座って控

えている。張子が、好き好きに丁目、

半目に賭けている。そこには、疾風の

三治(30)の姿も……。

三治、張札を丁目に賭ける。

合力C「半いないか？ 半いないか？」

合力D「半に限って三倍！」

張子が半目に賭け直す。

合力C「丁半、揃いました！」

合力D「はい、勝負！」

若き胴師・船岡朝太郎(25)が、壺

を上げる。

中のサイコロの目は、五と三。

合力C「グサンの丁！」

合力D「はい決まりました。丁です！」

合力が負け金を吸い上げ、分配する。

旦那B「あちゃあ、やられちゃったよ」

旦那C「あつしもいかれてしまいましたわ」

三治の前に勝ち分が配当される。

三治「フツ……」

にやける三治。

○同・賭場の奥の間(夜)

盆中にく続襖が開けっ放しになつてい
る。

その盆中の光景を、火鉢に当たりなが

ら煙管を吸つて見ている貸元・谷先菊

太郎(60)と、脇に控える代貸・黒

田蓑助(40)。

黒田「親分、どうです？ あの胴師」

谷先「おお、歳はまだ若えつてのに、なかな

かい仕事ぶりじゃねえか。名前はなんて

えんだい？」

黒田「へえ、船岡朝太郎って言いやして、ま

だ盃はどこからも貰ってないそうなんでや

すが」

谷先「こんな老いぼれの盃で良けりゃあ、受

け取って欲しいくらいだぜ。こんな見事な壺振りは、未だかつて見たことねえ」

その時、がらつと襖が開く。

襖の方を見る谷先と黒田。

若衆に案内され、お凧が入ってくる。

お凧は谷先と黒田の前に座り、一礼する。
る。

谷先と黒田も、それに応えて一礼する。

お凧「わしは花吹雪凧凧之姫鬼神。またの名を花吹雪のお凧という宿無神でござんす。

今晚、こん賭場で遊ばせて頂きたいと、親分さんに挨拶に伺いました」

谷先「鬼神さん、これは御丁寧に。あつしは

谷先菊太郎ってえ博徒の真似事してるケチな老いぼれでございやす。隣のは、この家

任してる黒田蓑助ってえもんでさ」

黒田「黒田蓑助です。よろしゅう」

黒田、お凧に会釈する。

谷先「花吹雪のお凧といやあ、博奕打ちの中で知らねえ者はいねえ。あつしもその御高名は聞いておりやす。どうぞ、存分に遊んで行っておくんせえ」

お凧「有難うござんす」

改めて一礼し、お凩は立ち上がる。

黒田「鬼神さん、失礼でございやすが、腰の物をお預りさせて頂きやす」

お凩「うん。ええよ」

お凩、黒田に刀を渡す。

黒田「へい、確かに受け取りやした。では、

どうぞ盆中へ」

黒田、一礼する。

○同・賭場の盆中(夜)

お凩「ちよっとごめんやす」

お凩、張子の後ろを通り、盆御座の前にちよこんと座る。

周囲の張子、合力、三下がお凩を見てざわめく。

旦那B「これは珍しい。鬼神さんじゃあ」

旦那C「ああ、立派な角をお持ちですなあ」

お凩「わしはお凩、花吹雪のお凩じゃ。よろしゅう頼むで」

船岡「手前は、壺振りを務める未熟者で、船岡朝太郎と発しやす。どうぞよろしゅう」

船岡、一礼する。

合力、三下も合わせて一礼する。

旦那B「おい、花吹雪のお凧だとよ」

旦那C「こりゃあ、面白い勝負になります
な？」

船岡、壺とサイコロを掲げる。

船岡「入ります」

勢いよく壺を振る。

合力C「さあ張った！」

合力D「さあ、どっちもどっちも！」

張子が、好き好きに賭ける。

お凧、張札を丁目に賭ける。

合力C「丁半揃いました」

合力D「勝負！」

船岡が壺を上げる。

出目は、二と四。

合力C「シニの丁！」

合力D「決まりました！ 丁です！」

合力が負け分を吸い上げ、勝ち分の分
配をする。

お凧の前に勝ち分が置かれる。お凧は
それを傍らに置き直す。

お凧「幸先ええのう。やったるで、おつかさ
ん！」

お凧、胴師船岡の目をじっと見続ける。

船岡も、お凜を見続ける。

× × ×

テロップ「二時後」

合力C「揃いました！ 勝負！」

船岡が壺を上げる。

合力D「シジロの丁！」

お凜「あ……」

船岡「悪うおましたなあ……」

お凜、合力に持ち金すべてを持っていかれる。

お凜「スツカラカンじゃあ……」

お凜、虚空を眺める。

旦那B「……鬼神さん、やっちゃったよお」

旦那C「今まで勝ち続けてたけど、強気に出すぎですなあ……」

旦那衆がひそひそ話す。

お凜「どうしよう、どうしよう……」

お凜の目が潤み、大粒の涙が流れだして激しく泣き出す。

お凜「うえくん、もうダメじゃあ〜！ お仕舞いじゃあ〜！ おつかさん、おつかさん〜」

ん！

お凜、盆御座に突っ伏してしまう。

盆中がどよめく。

船岡「ちよつと、お、鬼神さん？」

合力CD「客神、落ち着いて下せえ！」

○同・賭場の奥の間(夜)

谷先と黒田も、お凜の泣き声に驚いて

いる。

谷先「いつてえ、どうしたってんだい！」

黒田「さ、さあっ。」

谷先「とにかく、鬼神さんをすぐお連れする

んだ！」

黒田「へえ！」

黒田、立ち上がって盆中に向かう。

○同・賭場の盆中(夜)

盆御座の上を突つ切る黒田。

黒田「鬼神さん、他の客人衆の迷惑になりや

すから、ちよつと(ちぢらへー)！」

黒田、泣きじやくるお凜を抱っこして

運んでいく。

一度盆中に向き直り、軽く頭を下げる。

黒田「お騒がせしやした。どうぞ続けて下せ

えー！」

床にお凧を下ろすと、黒田は開けっ放しにしていた襖をピシッと閉める。

盆中の一同、襖を見て呆然としている。

合力C「さあさあ、気を取り直してもう一勝

負！」

船岡「入ります」

船岡、壺を振って盆御座に叩き付ける。

合力D「さあ、入りました！ どうぞ張って

下さい！」

○同・庭先(夜)

お凧の泣き声が、外まで聞こえる。

外で控えていた牙吉が、閉まりきった

戸の向こうを見つめている。

牙吉「負けちまったのか……。博打は運否天

賦。いくら姉さんでも、勝てるとは限らね

えよな……」

牙吉、月を見上げる。

牙吉「今夜は、月が綺麗だぜ……」

アオくん、と、牙吉は遠吠えする。

○同・賭場の奥の間(夜)

床に座りこんだお凧が、腕で涙を拭つ

ている。谷先と黒田は、それを黙って

見ている。お凜は、まだぐずついでい

るが、泣き声は止んでいる。

黒田「……鬼神さん、落ち着きやしたか？」

お凜「……(ぐすん)済まんのう」

谷先「……花吹雪のお凜が博打に負けてこい

まで泣くということは、何かのつびきなら

ねえ訳があるはずだ。聞かして下せえ」

お凜「うん。実はのう……」

お凜、静かに語りだす。

× × ×

お凜「……と言う訳なんじゃ」

涙を拭うお凜。

谷先「うくん、そういう訳ですかい」

谷先、腕を組む。

谷先「だが、鬼神さんも博奕打ちならわかる

でしょうが、どんな理由があっても、盆の

上の勝負は恨みっこなしの一騎打ち。負け

は負けで(ぐ)さいやす」

谷先の傍らで、黒田がうなづく。

お凜、涙を拭う。

お凜「……わかっておる、けど」

お凜、改まって正座し、両手をついて、

力のこもった目で谷先を見つめる。

お凩「親分さん、どうか、わしと勝負をして

おくんなさい！」

谷先「……勝負ですか？」

お凩「わしが勝ったら、おつかさんを治す金を出して欲しいんじゃない」

谷先「……いいでしょう。だが、鬼神さんが負けなすつたらどうしやす？」

お凩、黒田に目をやる。

お凩「代貸さん、わしの刀を！」

黒田、谷先を見る。

黒田「……親分」

谷先「お渡しするんだ」

黒田「……ん」

黒田、お凩の刀を出し、手渡す。お凩

は受け取ったまま刀を前に掲げる。

お凩「わしが負けたら、こん刀で首を斬り落とすんじゃない」

黒田「鬼神さん……本気ですかい？」

お凩「本気じゃ！ わしは、こん命を賭けるでー」

谷先、静かにうなづく。

谷先「鬼神さん……その意地、確かに受け取

りやした。なら、勝負の方法は？」

お凧「盆中同様、サイコロ二つに壺一つ！」

谷先「よし、ならば盆中で勝負だ。客人衆に

見届けてもらいましょう！」

○同・賭場の盆中(夜)

盆御座の前に座っているお凧。お凧の

傍らには牙吉がおり、盆御座を隔てて

向かい側に、谷先が座っている。中央

の奥に黒田、船岡、合力二人が立ち会

う。盆御座の周りには、客人衆や三下

がずらり。客人衆に紛れて、疾風の三

治もいる。

静寂の中、黒田が口を開く。

黒田「……これより、当家貸元、谷先菊太郎

親分と、御客神、花吹雪のお凧こと花吹雪

凧凧之姫鬼神様との、サシの勝負を行なわ

せて頂きやす。勝負は丁半。お互いに壺を

振って出目を予想し、先に三回当てた方を

勝ちとしやす。お二方、異存はありやせん

ね？」

黒田、谷先とお凧の顔を伺う。静かに

頷く二人。

黒田「……では、勝負を始めさせて頂きやす」

黒田、盆御座に置かれたサイコロ二つ
を手に取り、船岡に渡す。

黒田「……賽改めを願います」

船岡、サイコロを丹念に調べる。

船岡「……間違いはございせん」

船岡、黒田にサイコロを返す。黒田、

お凧と谷先の前に壺とサイコロを置く。

お凧と谷先、そのサイコロを一個ずつ

手に取って盆御座の上に転がす。

谷先「……そちらが先だ。どうぞ」

お凧「……ようし」

お凧は紅装束の右肩をはだけ、真っ白
な晒しが巻かれた体を露出させる。

その背中には、見事な花吹雪の刺青が

彫られている。

お凧、サイコロと壺を手に取って掲げ
る。

お凧と谷先、お互いに目を逸らさない。

お凧「入ります」

お凧、壺を振る。

谷先「……半」

お凧、壺を上げる。

出目は二と六。

黒田「二ロクの丁」

谷先、サイコロと壺を掲げる。

谷先「入ります」

谷先、壺を振る。

お凜「……丁」

谷先、壺を上げる。

出目は、三と四。

黒田「シソウの半」

お凜が壺を振る。

谷先「……半」

壺を上げると、出目は二と五。

黒田「グニの半」

谷先が壺を振る。

お凜「……丁」

壺を上げると、出目は二と四。

黒田「シニの丁」

盆中は静寂のまま、皆がその勝負を見

守る。淡々と壺を振り続けるお凜と谷

先。

谷先「丁」

黒田「ゴロクの半」

お凜「丁」

黒田「ニゾロの丁」

谷先「半」

黒田「イチロクノ半」

牙吉が息を飲む。

谷先が壺とサイコロを掲げる。

谷先「……入ります」

勢いよく壺を振り、盆御座に叩きつける。
る。

お凜、谷先をじつと見つめて……。

お凜「……半」

谷先、ゆつくりと壺を上げる。

出目は、一と三。

お凜の目が大きく見開く。顔に冷や汗
が垂れる……。

黒田「……サンミンチの丁」

お凜が壺とサイコロを掲げる。

お凜「入ります」

勢いよく壺を叩きつける。

谷先、お凜をじつと見つめて……。

谷先「……丁」

お凜、壺に手を伸ばし、がっしりとつ

かむ。その手は震えている。

その手に、全員の意識が集中する。

そして……。バツと壺を上げる。

お凜の目が釘付けになる。

出目は……。一と、一……。

お凜、全身が硬直する。

黒田「……。ピンゾロの……。丁」

谷先「……。悪うおましたなあ」

牙吉「……。姉さん」

牙吉が、お凜を見つめる。

黒田「……。勝負がつきやした。親分の勝ちで

いざいやす」

旦那衆がざわめく。

お凜、深く息を吸ったあと、盆御座の

上に座り直す。

お凜「……。博打は運否天賦。たとえ負けても、

恨みっこなしじゃけえのう」

お凜、うつむきながら苦笑する。そし

て、顔を上げ、声を張り上げる。

お凜「わしは花吹雪凜凜之姫鬼神じゃ！す

でに腹はできておるけえ、いつでも叩き斬

るがええで！」

谷先「……。よし、ならば、約束通りケジメを

つけてもらいましょうか」

谷先、立ち上がる。

谷先「おい！」

黒田「へい」

黒田、脇に置いていたお凜の刀を谷先に渡す。

谷先「客人衆、悪いがここからは外してもらいてえ」

× × ×

旦那衆が出て行き、盆中には、お凜と

牙吉、谷先と黒田、見届け人の船岡、

そして合力と三下が数人残るのみ。

谷先、静かに刀を抜く。

お凜、無言で首を垂れる。

谷先「……本当に、覚悟はできてやすかい？」

お凜「……できておる」

谷先、そっとお凜の首筋に白羽を当てる。

そして、刀を振り上げる。

黒田、船岡、合力、三下……皆がその

光景を凝視する。

牙吉「……姉さん！」

牙吉、堪らず目を背ける。

お凜、目をつぶる。

お凜「……おつかさん、伸太郎さん、つばき

ちゃん、約束守れんで済まんのう」

お凜の目から涙がにじみ出す。

そして……。

谷先「フン！」

谷先が刀を振り落とす。

しかし……。

谷先、寸止めでお凜を斬らずにおき、

黙って刀を再び鞘に納める。

谷先「……鬼神さん、ケジメがつきやした」

お凜「え？」

お凜、目を開けて谷先を見てきよとん

とする。

谷先「苦しむ者のために手助けしてこそその侠

客道だ。それを地で行く鬼神さんを斬るな

んぎ、これほど目覚めの悪いことはねえっ

てもんです」

お凜「……わしを、許してくれるのか？」

谷先「許すも何も、悪いことはしてねえ。鬼

神さんは、この盆御座のように、どこまで

も真っ白い御心を持っておりやす。赤の他

人同然の家族のために命を張るなんてこた

あ、常人ならできることじゃねえです。確

かに、サイコロの勝負ではあつしが勝ちや

した。だが、あつしは、鬼神さんの心に折れたんでございやすよ……」

谷先、お凜に笑みを見せ、刀を返す。

お凜、目を潤ませながら、刀を受け取る。

谷先「……代貸」

黒田「へい」

谷先「鬼神さんの言う百姓のおつかさんの医者代と薬代、それに、そんな家族が当面の生活をキツチリ送れるように、うちの寺銭から用立てして差し上げな！」

黒田「へい！ すぐにでも！」

お凜「……とつつあん！」

お凜、満面の笑みで谷先に飛びつく。

お凜「とつつあん、ありがとう。本当にありがとうございます」

谷先「いいんですよ。使うべき時に使つてこそその金でございやす。しかしまあ、さすがは花吹雪のお凜だ。負けつぶりも見事なものじゃねえですか！」

その場の全員、大笑いする。

○同・門前(夜明け頃)

外は少し明るくなってきた。

お凜と牙吉が、谷先と黒田、船岡に見

送られている。お凜は、大金の入った

小箱を持っている。

黒田「鬼神さん、お目当ての金、確かに渡し

やしたよ」

お凜「色々と、迷惑かけたのう……」

谷先「なに、これはあつしの気持ちでござい

やすから」

お凜「……じゃあ、こん金を渡しに行くけ

え、これにて失礼させてもらうで」

船岡「……近頃、疾風の三治って盗人がうろ

ついていると聞きやす。くれぐれも気をつ

けて」

お凜「忠告ありがとうな」

お凜、軽く会釈したあと、牙吉と共に

歩き出す。黒田と船岡、お凜に向かっ

て頭を下げる。

その様子を、離れたところから伺って

いる疾風の三治。

三治「……そん金は貰っただ！」

三治、こっそりと追いかけていく。

。村の小道（早朝）

大金の入った小箱を持って、歌を歌い

ながら意気揚々と歩いているお凜と牙

吉。

その後ろを、さりげなく尾行する三治。

お凜「一時はどうなるかと思うたが、これで

キツチリ約束を果たせるのう」

牙吉「おっかさん、ビックリしてかえって悪

くなったりして」

お凜「こら、縁起でもないぞ」

油断しきっているお凜と牙吉に近寄り、

三治が、小箱をひったくっていく。

牙吉「あっ！」

お凜「泥棒！」

泥棒、一目散に逃げていく。

お凜「追え、追うんじゃ！」

牙吉「おう！」

牙吉、俊足で三治を追いかけていく。

お凜も必死で走る。

× × ×

三治、泥棒なだけに逃げ足が速い。

牙吉「待て、待ちやがれ！」

牙吉、なかなか追いつかない。

お凜、かなり後ろから遅れて追いかける。

お凜「牙吉、何やつとるか！ 奴の尻に噛み付くんじゃ！」

牙吉「あの野郎、速いんだよー！」

牙吉、吠えながら疾走し続ける。

○廃寺の前(早朝)

誰も寄り付かないのか、雑草が生え放題になっている。

その寂しい寺に、三治が逃げ込んでいく。お凜と牙吉が、それを追って寺に入っていく。

○同・本堂(早朝)

壁や天井が朽ちて、所々開いた穴から光が漏れている。
錆びきった本尊には、蜘蛛の巣がかかっている。

お凜と牙吉が、勢いよく腐りかけた戸を蹴破って入ってくる。

お凜「仏さん、邪魔するでー！」
本堂内を見渡す。

牙吉「やい、ここに隠れたことはわかってん

だ！ 大人しく出て来な！」

牙吉、吠えて威嚇する。

お凜「盗ったもん返してくれば、何もせ

ん。じゃが、返さなければ、命はないと思

うがええ！」

お凜、腰の刀に手をかけ、鋭い眼光で

言い放つ。

その時、七首を手にした三治が、梁の

上から飛びかかる。

三治「こ、こん金は、おらのもんだあ！」

はつと上を見るお凜と牙吉。

牙吉「危ねえ！」

牙吉、咄嗟にお凜を突き飛ばす。

お凜「うわっ！」

お凜、吹っ飛んで転ぶ。

しかし、

牙吉「ぐわっ！」

襲い来る三治の七首が、身代わりになっ

た牙吉を切り裂く。

血を撒き散らしてうずくまる牙吉。

お凜「き、牙吉いっ！」

お凜、動揺して牙吉に駆け寄りうとす

る。

しかし、三治が七首を振り回して襲いかかる。

お凜「うあっー！」

七首が、お凜の頬を切り裂く。斬られた拍子に、さらに転がる。

お凜の頬に、斜めに直線状の裂傷ができ、血がにじむ。

三治「こん金はおらのもんだ。絶対に渡さねえ！」

三治が間を置かず襲いかかる。

お凜「このー！」

お凜、懐に忍ばせてあった小刀を投げつける。

三治「くおー！」

飛んだ小刀が、三治の左腕に突き刺さる。刺された拍子に転がる三治。

その間に立ち上がるお凜。

三治、すぐにそのまま刺された小刀を抜いて投げ返す。

お凜「うわあー！」

お凜、咄嗟に横に飛んで小刀を避ける。

小刀が、本尊の額にぶつかって弾かれ

る。

すかさず三治が七首を突き立て、突進
してくる。

三治「うおおお！」

七首を振り上げる三治。

お凜「こ、この下衆があ！」

ほんの一瞬差。

お凜、腰の刀を抜き、力任せに三治の
胴を叩き斬る。

三治「うぐっ！」

三治の動きが止まる。手から、七首が
落ちる。

お凜「真っ赤な血花の乱れ散りじゃ！」

刀を納めるお凜。

その直後、三治の胴が裂け、大量の鮮
血が噴出する。絶叫しながら血で真っ
赤に染まり、倒れる。

興奮して息の荒いお凜。

× × ×

牙吉「う、うう……」

うずくまっていた牙吉、立ち上がろう
とする。

お凜「牙吉い！」

お凜、牙吉に駆け寄り、抱き抱える。

お凜「お前、どこ斬られた？ 大事ないか？」

牙吉「脇腹をちよつとな」

牙吉の左脇腹が、一文字に裂かれて血だらけになっている。

牙吉「……なに、大したことねえつて。う

ぐっー」

牙吉の顔が引きつる。

お凜「おい、本当に平気か？」

牙吉「大丈夫だつて。凄え痛いけど……」

牙吉、クウーン、と鳴く。

お凜「馬鹿者があ……そんな声出すなあ」

牙吉「……姉さん、俺は馬でも鹿でもねえ」

お凜「わかつとる。お前は狼じゃ。一端の狼

じゃー！」

お凜、牙吉を抱き締める。

お凜「……じゃから、こんなんでくたばるん

じゃないぞっ」

○百姓家・外観(朝)

山の向こうに日が昇っている。

○同・居間(朝)

伸太郎が、神棚に手を合わせている。

伸太郎「鬼神さん、どうか、おつかさんを助けてやって下せえ！」

その時。

お凜「伸太郎さん、伸太郎さん！」

お凜が大金の入った小箱を持って飛び込んでくる。

伸太郎「鬼神さん、お帰りなさい！」

お凜、どすんと小箱を床に置く。

お凜「これ、約束の金じゃ！ おつかさんの

医者代、薬代、おまけに当面のやりくりのための金もある！」

伸太郎「じゃあ？」

お凜「博打自体はボロ負けじゃった！ じゃが、その負けつぷりを親分さんが買ってくれたんじゃ！」

伸太郎、小箱を開ける。すると、伸太郎はぎよつとする。

伸太郎「こ、これは、なんつう大金だ！ 当面のやりくりどころじゃねえですよ？」

お凜「そんなことよりも、大事なことがある

んじゃ！」

伸太郎「へ？」

お凜「針と糸くれ！」

× × ×

お凜、牙吉を押さえつけて、糸を通した針をブスツと刺す。

牙吉「ぎゃああ！」

お凜「うるさい！こんくらい我慢せんか！」

お凜、針をブスブスと刺し、牙吉の傷

口を縫い合わせていく。

○同・軒先

お凜と牙吉が、伸太郎とつばきに見送られている。

伸太郎「鬼神さん、お蔭さんで、おつかさんを医者に診せて、薬を買ってやることできやす。有難うございやす。この御恩は一生忘れやせん」

頭を下げる伸太郎。

お凜「何、わしは結局、なんの役にも立つとらんけえのう。気にせんでええよ」

伸太郎「いや、親分さんの厚意とは言え、そうさせたのも鬼神さんの御心ですから」

お凜、ちよつと嬉しそうに照れる。

お凜「とにかく、おつかさんが早くよくなる

とええのう」

伸太郎「へえ。そちらこそ、お連れの怪我が

早く治るといいですね」

牙吉「ああ、俺はもうへつちやらよ」

晒しを巻かれた牙吉、平然と尻尾を振っ

ている。

牙吉「そろそろ行くこうか、姉さん」

お凜「そうじゃな」

つばき「お凜ちゃん、これからどこに行くの？」

お凜「どこじやろうな。気ままな旅じゃけえ、

行き着く所に行くだけじゃな」

つばき「結局ほとんど一緒にいられなかった

から、ちよつと寂しいな。また戻ってく

るっ」

お凜「うーん、これ、つばきちゃんに預けとくな？」

お凜、つばきにサイコロを渡す。

つばき「サイコロっ」

お凜の目を見てきよとんとするつばき。

お凜、ニコツと微笑む。

お凜「いつか会う時まで、それを神棚に掲げ

て、わしだと思っついておくれ」

お凜、三度笠を被る。

お凜「さいばん、なむびびじゃー」

お凜、道中合羽を翻し、牙吉と共に颯
爽と歩いて行く。

その背中を見つめ続ける伸太郎とつば
き。

○村の小道

お凜と牙吉が、陽気に歌いながら歩い
ている。すると、お凜の腹が、グウ、
と激しく鳴る。

お凜「……そう言えば、一睡もしとらんし、
何も食つとらんろう。すっかり忘れとった」

牙吉「じゃあ、あの家に戻るかい？ まだそ

う遠くはねえはずだ」

お凜「いや、そのへんの川に出て、昨日の魚

取りの続きでもするぞ」

牙吉「おう、そりゃいいや」

お凜「今度こそ、大物を捕まえるけえのう！」

終